

昆虫ゼリーを作りたい

札幌市立手稲中央幼稚園（北海道札幌市）

[5 歳児]


途中入園のB児は、入園してから園庭や隣接する自然林での虫捕りを継続して楽しんでいた。

ある日、林でバッタを捕まえたB児は、そのバッタを大切に虫かごに入れ、保育者の所に持ってきた。
2年保育5歳児

幼児の姿	保育者の見取り・願い	援助・環境構成
<ul style="list-style-type: none"> ・「先生、バッタって何を食べるんだろう？」 ・すぐに図鑑を探しに行くが、バッタの食べるものについて載っている図鑑はなかった。「先生、（図鑑）なかったよ。」 ・「捕まえたバッタ、家に持って帰ってもいい？」 <p><翌日></p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝、登園すると、保育者の近くを紙片を持ってウロウロしているB児。 ・持っていた紙片を保育者に見せる。昨日の降園時、地域の図書館に寄って図鑑を借り、そこに載っていた昆虫ゼリーの作り方を、B児は自分で書き写して持ってきていた。 ・保育者の話を聞いたC児とD児が協力してくれることになり、B児も気持ちが盛り上がっていった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本児なりに捕まえたバッタのために考えているようだ。 ・残念そうである。あきらめきれない様子が見られる。 ・飼育するつもりだろうか？何か、本児なりの考えがあるのだろうか？ ・保育者に何かを言いたそうにしている。 ・とても丁寧に書いてある。字を書くことにあまり自信のないB児であるが、図鑑をそのまま模写してしっかりと書いていることに感動する。<u>この強い思いを一緒に実現してあげよう。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・「う～ん、先生もわからないなあ。絵本の部屋に、図鑑があるから調べてみたら？」と、図鑑について知らせる。 ・大事に飼育することを約束し、また、保護者にも今日のいきさつを知らせて、バッタを持って帰らせる。 ・「どうしたの？」と声をかける。 ・「すごいね、B児君。これなら作り方もばっちりわかるね」と認め、「一緒に作るうか？」と誘いかける。また、他の幼児にもB児の考えていることを知らせ、力を貸してくれるようにお願いする。



<ul style="list-style-type: none"> ・B児「果物がないけど、何を使ったらいいかな？」 ・B児、C児、D児の3人が賛成し、C児とD児が桑の実を集めに行く。 ・C児とD児はすぐにたくさんの桑の実を持って帰ってきた。 ・洗った桑の実を、鍋に入れて煮る様子をじっと見ているB児。鍋が熱いので、中身をかき回すのは保育者の役目だが、鍋をのぞき込むようにして見ている。 ・甘酸っぱいにおいを漂わせて、ゼリーの完成。小瓶に入れて、冷蔵庫で冷やし、早速、 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園で手に入るものを使って作ったら面白そうだ。 ・C児とD児も、B児の考えの面白さに、共感したようだ。とても楽しそうに、桑の実取りに出かけたぞ。 ・B児も桑の実を見て嬉しそうである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「（園に隣接する）林の桑の実も甘いよ。それを使ってみたら？」 ・C児とD児に桑の実取りは任せ、B児と一緒に電熱器と鍋、砂糖などを用意する。 ・早速3人と一緒に作ることにする。 ・保育者も3人と一緒に、楽しみながら桑の実を煮込んでいく。
--	---	---

<p>バッタの入っている虫かごに入れてみる。</p> <p>・ B児「・・・。食べないね。どうしてかな？」 「砂糖が足りなかったのかな？」「まだゼリーが熱いんじゃない？」とB児なりに考える。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「バッタはこれを絶対に食べるはず」という気持ちで保育者の手元を見ているようだ。B児の気持ちが保育者にも伝わってくる。 ・ B児の予想と違って、バッタはなかなかゼリーのところまでは行かない。その原因を、B児なりにいろいろと考えているようだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ B児の頑張り認め、「きっと食べるよ。みんなが見ていない時に食べるんじゃない？」と話し、B児と一緒にバッタが食べないことについて一緒に考える。
---	--	--

<考察>

- ・ B児の「知りたい」という思いとその思いの強さを、ゼリー作りという一つの遊びにつなげていくことができたことは良かった。思いや考えを一緒に実現していくことで、さらに考えようとするB児の姿につながった。
- ・ 子どもたちにとって身近な「桑の実」という材料も、C児やD児がすぐにイメージをもてたように、この遊びの一つのポイントである。「自分たちの力」で材料を揃えたり、身近な素材を使って作ったりできることが、遊びの面白さを高め、自然物に対する興味をさらに高めている。

[まとめ]

幼児は、自然物と触れたりそれらを遊びの中に取り入れ実際に体験する中で、様々な不思議さを味わい、経験を積み重ねている。

この経験は、一度きりの経験ではなく、それぞれが関連づいていることもわかる。幼児の言葉や気持ち、行動を保育者が見取り、それを関連付けた経験を保育者の援助によって展開している。こうした遊びや生活を通した経験の連鎖の中で、幼児は自ずと考え、試行錯誤し、更に考えるといったことを積み重ねているのである。これは幼児期に育みたい思考力の芽生えと大きくつながると考える。

また、自然のものの不思議さは、幼児の心を動かす要素をたくさんもっていることもわかった。それは身近な存在ではあるが、大人でもわからないことがたくさんあるということも幼児の心を動かすのである。保育者が一緒になって考えたり、友達と一緒に試行錯誤したりすることが、もっと「知りたい」という思いを増幅させ、知る喜びを高めていくのだろう。

自然物に対する幼児の「不思議を感じる心」と、それを遊びや生活に取り入れる保育者の「知」のかかわりによって、幼児はより深い「科学する心」を体験することになる。そして、その体験を相互に関連させることが科学する心を育てることにつながると考える。

みどころ

飼育するには餌が必要なことは、幼児でもイメージできることですが、虫のいる幼稚園だけでなく、家庭という場面が変わった所でも調べていることから、虫への思い“科学する心”が伝わってきます。また、餌を自分たちで作ろうとすることから、“科学する心”が意欲や行動に結び付き、更に育まれることがわかります。